

次壇

秋蝶に触るものなし触れたらば光の中に
ヴァイオリン凍つ 東京 吉岡 耕大
ぼつとぼつとわらわらとゆるやかに
ぼつとぼつとわらわらとゆるやかに

沈黙の言葉をそっと聴きとめるあなたは遠き
星を眺むひと 所沢市 里見 脩一
孟喜のミストのようにつらな影でも人へ寄り添

人かげを母と決めつけ子牛起ち乳首もとめて
走り寄りたり 水戸市 山口 康彦
白手を打つてくぐりぬけをぬれぬ母と父、

誰しもが生き急ぐ夜の片隅にエンドロールを
終わりで観る 横浜市 井上 登
独れることば許されぬその背中あなただけ毎

ps://mainichi.jp/kadan-haidan/
受け付けています。
媒体との二重投稿や同一作品を複数の
に投稿するのは厳禁。投稿は趣旨を
変に添削することがあります。入選作は
新聞社の電子メディアやデータベ
「アプリ」で公開します。

詠む広場

何人で見てもひとりの海だろ それぞれの
持つ死から覗けば 川崎市 二宮 珊瑚
△評▽すべての生命の源である海とはすな
わち大いなる死。それぞれの小さな死から
のぞけば。

青春が戦時になると知らないで生まれた姉は
今年百歳 川西市 波 高し
△評▽今年が100歳なら、昭和初めの生
まれ。戦時下で青春を過ごすなど苦難の
姉の人生を深く思いやる作である。

聡明な林檎もいつか朽ちていく光待ちわぶせ
ザンヌの影 川崎市 新井 将
△評▽多くのリンゴの絵で知られるザン
ヌ。果実の有限の時間を光と影のうちに閉
じ込めようとした。1、4句も巧みだ。

介護終え一時の幸やゆくりと蟬声聞きてコ
カコーラ飲む 須崎市 野中 泰佑
△評▽介護の後の休憩時間である。また仕
事に戻るのだ。「蟬声」の季節感が良い。
コカコーラに現実感がある。聴覚と味覚だ。
ほとんどの改革は無駄な店も店のレイア
ウト変えやがって 広島市 堀 眞希

こちらから
投稿できます

毎日俳壇

かくれんぼ鬼のこされし夕焼かな
秦野市 安藤 泰彦
△評▽夕焼けが空を染める夕暮
れ、かくれんぼの鬼になった子は
いつまでも誰かを見つけていることが
出来ず、ぼつと取り残されている。
地軸なほ傾いて来し残暑かな

急な客香水の香を残し去る
小平市 齋藤 幸枝
△評▽客の人物像があざやかに浮
かび上がる。前触れもなくやって
きてよい印象を残すこともなかつ
たようだ。季語の香水が際立つ。
耐へがたき橋の真中の大西日

虹消えて駅弁の箸うごきたす
四條畷市 中尾 謙三
△評▽虹の見える時間は日常から
遊離する気がする。我に返って弁
当の続きを食う。
立秋や栓抜き残るカウスター

真白なる聖母の手望朝涼し
徳島 坂尾 徑生
真白なる聖母の手望朝涼し
掃苔や空調服のモーター音
病室に西日が長く射しにけり
旧道に残る旅籠や水を打つ

取り合わせる季語を「原爆忌」ではなく
「広島忌」にしたのは、上五中七が朝のや
りとだと伝えるためでしょうか。あるいは
「広島忌」を夏の季語と捉え、夏の句と
して詠んだのかも知れません。広島市に原
子爆弾が投下されたのは、1945年8月
6日午前8時15分頃。快晴で、気温はぐん
ぐん上昇していたといわれています。
同7時9分に出された警戒警報は22分後
には解除され、人々は掲句のようにそれぞ
れの日を始めようとしていました。突然
襲ってくる「新型爆弾」に町も日常も一瞬
で破壊され、多くの犠牲者が出てしまっ
たと誰が想像できたでしょうか。改めて
あたりまえの日々のありがたさを感じま
す。(えんどう・みか「俳人」)

少年のやうな笑顔やソーダ水
東京 小栗しづゑ
万緑の湖底横たふ朽木あり
鎌谷市 佐藤 紀子
紫陽花の咲き満つる頃生まれ来し
生駒市 浦城 博子

汗のシャツ脱ぐに幼な手を借りて
越前市 加藤 隆規
盆踊り一声かけて輪の中へ
越谷市 新井高四郎
岩陰のいつもの場所へ夜釣人
和歌山 馬谷富貴子

梅雨明けや煽り続ける中華鍋
堺市 佐々木正二郎
ぐい呑みの青竹香る冷し酒
和泉市 杉崎 利雄
鈴離子聞こえて写経はかどらず
兵庫 小林 恕水

△評▽京都の祇園祭の鈴離子は、
鈴建てが終わると毎晩町内に響き
わたる。いよいよ祭りが始まると思
うと落ち着かない。
子に着せてみむとて夫の白飛び
茨木市 ながたにうたこ

△評▽80代の作者から想像する
に、男盛りの息子さん。おしゃれ
な着物がきつと似合うだろう。
穴あきのスツクの記憶草いきれ
慎ましき通夜の一間の蚊遣香
志木市 谷村 康志

俳句てふてふ
注目的一句
円堂実花
塩津
アプリ
俳句てふてふ
投稿はアプリから。ダウンロードはこちら

何歳でも 毎日充実! 60代 70代
脳血管 隠れ 新らしいことは 習い事 学び直! ひとり旅も! 今自分に 夢中にな 何歳でも 毎日充実! 60代 70代
今日からすぐで うちで簡単